# O1-6 デイサービスにおける利用者の自己選択に及ぼす影響の検討 ～自己選択群と非自己選択群の比較～

○野島 伴浩（OT）[1)]，東 克也（OT）[1)]，赤堀 将孝（OT）[2)]

1）有限会社みすみ いつきリハビリテーションサービス
2）はくほう会医療専門学校赤穂校

Key word：意思決定，通所介護，主観的健康感

**【はじめに】**要介護高齢者が主体的で自立した日常生活を営むためには「その日をどのように過ごすか」を自己選択や自己決定できるよう支援し，それを最大限尊重することが重要である．現に介護保険施設や通所介護において，自己選択や自己決定の取り組みによる効果が報告されている．当施設においても，様々な作業活動や機能訓練課題が書かれたカードの中から自分がやろうと思うカードを自己選択し，「その日をどのように過ごすか」一日の予定を立てることができる環境にしている．しかし，実際には施設にいる全ての利用者が一日の予定を自己選択できるわけではなく，自己選択が難しい利用者に対し，その都度適切な介入が求められる．そこで今回，自己選択ができる利用者と，自己選択が難しい利用者の間に及ぼす影響が何であるかを把握するために，自己選択群と非自己選択群の比較を実施した．

**【対象と方法】**対象は当通所介護施設利用者とした．研究の同意の得られた者の内，意志疎通ができない者，認知機能が著しく低下している者，サービス利用開始直後の者を除く27名（男性6名，女性21名，年齢80.4±7.3歳）を対象とした．対象となる27名を，様々な作業活動や機能訓練課題から一日の予定を自立もしくは促しがあれば自己選択できる者（自己選択群）と，自己選択に介助が必要な者（非自己選択群）に分類し，両群に対し比較を行った．評価期間は2018年12月～2019年1月末の2ヶ月間であり，評価内容は，介護度，握力，5m最大歩行時間，Timed Up & Go Test（以下，TUG），Mini-Mental State Examination（以下，MMSE），一般性セルフ・エフィカシー尺度（以下，GSES），主観的健康感尺度，Barthel Index，老研式活動能力指標とした．統計ソフトはEZR version1.37を使用し，t検定，Mann-Whitney U検定を実施した（有意水準5%未満）．本研究は，はくほう会医療専門学校赤穂校倫理審査の承認を得ている．

**【結果】**対象となる27名は，自己選択群17名，非自己選択群10名に分類された．そして，評価項目において，2群に有意な差がみられたものは主観的健康感（$p < 0.01$）のみであった．

**【考察】**今回，自己選択に関係する要因として，主観的健康感に有意な差がみられ，その他の握力，認知機能などの心身機能面や移動能力，ADL，IADLといった活動・参加に関する結果に有意な差はみられなかった．これは，たとえば身体的側面が重度であり，ADLを含むあらゆる活動において介助を必要とする場合であっても，その都度支援者に助けを求めることができる施設内の環境下であれば，能力的に一人でできない課題や活動が少なくなる．そのため，一日の予定を自己選択する上では運動機能や認知機能，活動・参加における自立にあまり影響されないことが考えられる．また，主観的健康観に有意な差がみられたことから，自己評価が健康であり，その日の自身の状態に合わせて課題を実施できるという自己肯定的な認識をしている者が一日の予定を自己選択できる傾向にあると推察される．そうなった場合，行動選択に直接影響を及ぼすとされるGSESに有意な差がみられなかったことについては，総合得点の幅も広いことからばらつきが生じやすい評価であるが，対象とする人数が各群少なく一人の対象者のもつ影響が大きくなっているためであると考えられる．今後は複数施設間における対象者数の一定数の確保やより具体的な影響を与えている要因の検討をしていく必要があると考えられる．